（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属：保健学研究科　1年

氏　　名：猪目　安里

授業科目名	周産期医療論
研修先（国・地域） 滞在地	ニュージーランド（ダニーデン・オークランド）
研修期間	平成29年2月18日（土）　～　平成29年2月24日（金）

〔研修を通じて得た成果〕

研修を通じて、日本とニュージーランドの助産師の専門性、そして助産師の自律について学ぶことができた。ニュージーランドの助産師は「女性とのパートナーシップ」、そして「自然な妊娠、出産に対するケア」について専門性を見出しており、女性と関わる期間に助産師として最良のケアを行う知識・技術を助産教育の中で身につけていた。また、「自然なお産」に関しては医師の介入はほとんど見られず、助産師が主体となっていること、助産師自身が自らを「医師に認められた存在」として医師と同じような立場でケアに取り組んでいることから、ニュージーランドの助産師の自律を感じた。

このように専門性が明確であること、助産師が自律して働くことができるために、大学の教育から日本とは異なっていた。大学の教育は、卒業してすぐ開業できるレベルに育てる内容であり、日本の助産教育に比べ時間数から違いがあった。そして、学生の時から実習先や対象を自ら探し、学生が主体となって活動することが多く、助産学生の時から自律して行動していることを強く感じた。

日本とニュージーランドは周産期医療の現状や国民性は違うが、助産師としての専門性や助産師として自律については同じように考えることができる。しかし、ニュージーランドについて学んだあとに日本について振り返ると、日本の助産は、助産師の就職先は病院が多いこともあり、医師の存在が強く影響していると考えられる。日本はCLoCMiP 制度などの導入により少しずつ前に進んでいるが、真の助産師の自律に向けてはまだ動き出したばかりなのだと、ニュージーランド研修を通して感じることができた。日本の外を知ることは、日本についても知ることとなり、日本の枠だけでなく世界からの視点で助産について考えるできる貴重な研修であった。

〔研修後の抱負〕

今回の研修では、いかに自分の視野が狭いものであったかを知ることができた。また、人との交流の中で自分が消極的姿勢であることも強く感じた。ニュージーランドの助産学生の自ら学びに行く姿勢に比べ、私は学習態度から改めなければならない。常に受身の姿勢であったが、何事にも積極的に取り組んでいきたい。そして、ニュージーランドの助産師の自律している姿を見て、私たち助産師が「助産」を専門にできることを多く知ることができた。これから助産師として社会に出るにあたって、助産師として自分に何ができるのか、助産師として周囲に認めてもらうことができるだけの知識・技術の修得に励んでいきたい。そして、日本の考え方のみに留まるのではなく、今回の経験を常に思い起こし、今後の日本の助産に貢献できる助産師を目指していきたい。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者
所属：（学部（研究科）・学年）保健学研究科 1 年
氏　　名:岡村玲奈

授業科目名	周産期医療論
研修先（国・地域） 滞在地	ニュージーランド（ダニーデン、オークランド）
研修期間	平成 29 年 2 月 18 日 （土）　～　平成 29 年 2 月 24 日 （金）

〔研修を通じて得た成果〕

今回の研修で、ニュージーランドの助産師は女性とパートナーシップをもってケアを行うことを大切にしていることを知ることができた。女性と助産師は対等な関係で、妊娠から産後までともに取り組んでいき、女性の決定を助産師が全力でサポートする。研修一日目に見学させていただいた一次施設の壁の掲示に「It ‘syour decision」と書かれていた。女性の意思を尊重し、女性自身が決定できるようにすることをケアの大切な方針としていることが分かる。どのようなお産をしたいのかを聞き、可能な限りそれを実現できるようにサポートし、その決定を責めるようなことはしないのだという。女性とパートナーシップを築いて妊娠期から分娩、産後までサポートすることができることは助産師の専門性の一つだと考える。助産師は、医療面と精神面、両方からケアを行うことができ、妊産婦にとって不安な出産を迎える上でとても大きな存在である。

研修を通して強く感じたことは、ニュージーランドの助産師は自立してケアを行っているということである。ニュージーランドの助産師は日本と比較してより多くの権限と責任があり、医師なしで分娩を行うことができるし、処方箋を書くこともできる。ニュージーランドの助産師はダイレクトエントリーであり、看護師とはまた全く別の職業とされている。日本では、助産師という職業は一般の人にはあまり理解されておらず、看護師と区別もついていない人も多い。日本の助産師が専門性を確立するためには、まず日本の助産師の専門性とはなにかと聞かれた時に答えられるようにならなくてはならないと思う。私は、今回のニュージーランド研修で、助産師の専門性とは女性と共にパートナーシップをもってケアを行っていけることではないかと考えた。これは医師にはできない助産師だけがなし得るもので、助産師がどのような存在か示すものだと考える。2 年生になれば、実際に助産の現場で実習できるので、このことも考えながら取り組んでいきたいと考える。

〔研修後の抱負〕

ニュージーランドの助産師の学生は、自分で考え、自分から学びに行く姿勢を持っていると感じた。オタゴポリテクニックの学生は学校にくる日は限られており、それ以外は自宅などで学習しているという。それぞれ自分の意見に自信をもって発言しており、それは自主学習を十分に行い多くの知識を持っていることも関係していると考える。自分では学習しているつもりであったが、教科書だけで満足している部分もあり、わからないことはとことん調べる姿勢がなかったと今までの自主学習を反省した。自立した学生になるために、与えられたものだけをするのではなく、なにが必要か考え、自ら行動することが大切にしていきたいと考えた。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者
所属：保健学研究科1年
氏　　名:佐藤ひかり

授業科目名	周産期医療論
研修先（国・地域） 滞在地	ニュージーランド（ダニーデン・オークランド）
研修期間	平成 29 年 2 月 18 日　～平成 29 年 2 月 24 日

〔研修を通じて得た成果〕

今回の研修に臨むにあたり、スライドの発表やニュージーランドでどのようなことを学びたいかなどを常に考えながら準備を行ってきた。役割分担をし、日本の助産師について、ニュージーランドの助産学生や先生にどのようにしたら上手く伝わるかなど、何回もいろんな先生に協力をもらいながら工夫して、準備を進めた。また、準備を進めるなかで、ニュージーランドの場合はどうなっているのかなど、疑問に思ったことはメモし、現地で質問できるようにした。

ニュージーランドの助産師の行えるケアの範囲も広く、なにより、自分が助産師であることにとても誇りに思っているように感じた。ニュージーランドの助産師は、学生の間に自ら多くのことを学び、2400 時間を超える実習を経て、自信をもって働いている。専門性とういう観点でみれば、ニュージーランドの助産師は、学んできた知識や技術をフル稼働させて、専門性を十分に活かして働いていると考えられる。

プレゼンテーションでは、自分たちのつたない英語での発表を、皆さん真剣に聞いてくださり、本当に頑張ってよかったと感じた。ニュージーランドの学生は、どんどん自分の力で前に進んでいる。オタゴポリテクニックの助産の先生が、スライドの中でも説明していたように、大切なのは自立する事なのだ、とニュージーランドの学生をみて、改めて考えさせられた。

この研修に参加できたことで、一枚自分の殻を破くことができたのではないかと考えた。今まで、あまり自分から積極的に話す方ではなく、変わらなければならないと心の中では思っていたが、それをなかなか変えることができなかった。しかし、この研修で、自ら積極的に質問するように心がけ、その質問に対し、みなさんしっかり答えてくださったことが、自分の自信にもつながり、自分自身がひとつ成長することができた。

〔研修後の抱負〕

今回、英語でのプレゼンの発表という機会を得ることができ、緊張したが、楽しんで発表することができた。この機会を経て、将来 ICM で発表してみたいという大きな目標ができた。これから、少しずつ経験を積んで、前に進んでいこうと思う。

ニュージーランドの学生との交流や、授業を受けさせていただいたことで、学生としての自立を改めて考え直すきっかけとなった。今後、もっと自分から貪欲に学び、”教えてもらう”のではなく、勉強してきた上での確認や疑問の解決として、授業に参加していこうと改めて考えた。大切なのは自立することという言葉を学生の間だけでなく、助産師として働く際にも、大切にしていきたい。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者
所属：保健学研究科１年
氏　　名:柴尾　美琴

授業科目名	周産期医療論
研修先（国・地域） 滞在地	ニュージーランド（ダニーデン・オークランド）
研修期間	平成 29 年 2 月 18 日～平成 29 年 2 月 24 日

〔研修を通じて得た成果〕

今回のニュージーランド研修を経て、助産師としての在り方を学ぶことができた。ニュージーランドの助産師は１人１人が自律していたが、それだけではなく、協調しあいながらも働いていた。助産師学生として自律することを日々の学校生活で指導して頂いた。自律とは何なのか、考えながらも大学院に入学して１年も経ってしまっていた。しかし、今回の研修で自分の中にあった助産師としての自律という概念を明確につかむことが出来た。

助産師だけではなく、ニュージーランドの助産師学生は、常に自分の意見を持ち、それを発言していた。学生同士で疑問を話し合い、ただ受動的に教師の話を聞くという授業スタイルは全くなかった。授業の中で、精査時には新生児の腸の音を聞きましょうと教師が学生に伝えた場面があった。その時、１人の学生が「腸の音を聞き必要はあるのだろうか、みんなどう思う？」と投げかけていたのだ。私は、今まで教科書に載っていることは正しいと思い、全て受け止めていた。教科書の内容に疑問を感じることなく、全てただ吸収していただけだと気づかされた。

助産師学生として自律するためには、発言力と人と人との話し合いが必要であることを今回の研修で学ぶことが出来た。イエスなのか、ノーなのか、分からないのか、しっかりと自分の気持ちを言葉にすることは自律するための初めの一歩であると考えた。また、学校内の友人だけにとどまらず、多くの助産師学生と話をすることも自分の考えを豊かなものとし、必要不可欠なことだ。

学生のうちに自律について考えることによって、将来助産師として病院の決まりや決まったケアに対して、疑問を感じた際に、「疑問に感じたこと」を発言し、同じ職場で働く者同士の話し合いを行うことができると考えた。そして、ケアの質が高められ、多くの母子とその家族にとって個別性の高いケアを提供できる病院を自分たちの手で作り上げることができる。

〔研修後の抱負〕

研修とは、自分自身の成長と知識・技術を促すことのできる場だと考えていた。学びたいことが学べる機会でもあり、興味があることは積極的に学びに出かけようと考える。しかし、それだけではなく、自分の輪を広げるのに研修は絶好のチャンスでもあると感じた。研修に出かけ、知識と技術だけを持ち帰っただけで満足してはならない。多くの人と研修を通して、交流することで様々な考えを持つ人と話をすることができ、考えも豊になる。豊かな発想や考えは、助産師として働くために必要だと考えている。そのためには、やはり自発的な発言や、積極的なコミュニケーション力を育てていかなければならない。

助産師として働きだす前に、自分なりの課題を見出すことが出来、研修への心構えを振り返ることのできる貴重な機会となった。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者
所属：保健学研究科　1 年
氏　　名: 田中　一枝

授業科目名	周産期医療論
研修先（国・地域） 滞在地	ニュージーランド（ダニーデン・オークランド）
研修期間	平成 29 年 2 月 18 日～平成 29 年 2 月 24 日

〔研修の成果〕

今回の研修を通して学んだことは、ニュージーランドの助産師は女性とのパートナーシップを非常に尊重しているということである。普段のケアを行う中でも女性を尊重していると思いながら働いているつもりであったが、ニュージーランドのバースセンターの助産師を話すことで本当に女性を尊重することとはについて再度考えることができた。妊婦健診では LMC が自宅に赴き健診したり、産後も LMC が訪問したりするとのことであり、自宅での女性の過ごし方を直接見ながらケアすることができ、生活に即したケアができると考えた。妊娠期からの継続ケアが重視されており、同じ助産師が継続してケアすることで信頼関係を築くことができると考える。ニュージーランドの LMC の制度では施設を変更になったとしてもその助産師が分娩につくことができるというのは、日本にはない、より安心できる環境である。普段から関わりのある、信頼における助産師がサポートすることで、女性が多くの不安や悩みを抱える中、子育てしていく中での相談がしやすいのではないだろうか。

また、あらゆることが女性の選択や決定に委ねられており、それが安心して妊娠から産後まで過ごすことができるようにされていた。もし、VBAC を希望する女性がいたとしたら、それを尊重し、リスクをすべて説明し、必要な医師の診察などを受けた上で安全に分娩が行えるようにサポートしていることも女性が安心して分娩することができると考える。OGTT の検査についても、日本では全例行うこととなっているが、ニュージーランドでは検査の説明を行い、希望された方に実施することが通常であるとバースセンター—の助産師は話されていた。肥満や家族の糖尿病歴があるなどのリスク因子を持っている方に強く勧めるが、その決定は女性に委ねられている。たとえ女性が私たち助産師からすると好ましくない選択であったとしても、その女性を否定せず、尊重すると助産師の方々は話されていた。女性が自ら決定することができる環境にあり、女性の決定を尊重し、安全に周産期を過ごすことができるよう手立てを共に考える LMC の存在が、女性の自己効力感につながり、安心できる環境の提供につながるのではないかと考える。

また、今回の研修でニュージーランドの助産師は自立しているということを実感した。バースセンターで働いている助産師はとても自信をもって働いているようであった。バースセンターで、助産師が妊婦健診の予定を組んで、様々な検査結果の判読や診断を自分たちで行うことが当然であることを聞き、日本の助産師との大きな違いを感じた。日本では助産院に通う妊婦も医師の診察が必要とされており、助産師だけですべて判断すること自体に驚きを感じ、また助産師の診断能力の高さや責任感の重さ、またそれらが実行できる誇りをもって働いており、それが自信になっていると考えた。日本でも同じように自信をもって働くことができるように、向上心をもって研修に参加したり実践を積み重ねていくことが必要であると感じた。

〔研修後の抱負〕

今回の研修を通して、ニュージーランドの助産師が大事にしている女性とのパートナーシップを尊重できるようにするために、助産師としての専門性を高め、質の高いケアを提供し、それらを継続して行っていけるようにすることが必要である。そのために日本で始まったクロックミップの制度などを利用しながらよりよいケアを助産師全員が目指すことが今後は必要であり、私自身も実践を積み重ねてより良いケアが提供できるように学習を深めていきたい。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者
所属：保健学研究科　1 年
氏　　名：久本　香菜

授業科目名	周産期医療論
研修先（国・地域） 滞在地	ニュージーランド（ダニーデン、オークランド）
研修期間	平成 29 年 2 月 18 日（土）～24 日（金）

〔研修を通じて得た成果〕

今回のニュージーランド研修では、第一次分娩施設、Otago Polytechnic 大学を訪問させていただいた。第一次分娩施設は、わが国の周産期医療体制との違いがわかり、助産の仕組み、分娩の方法、助産師の自律について学んだ。ニュージーランドでは LMC という制度があり、妊婦が助産師を選択し、妊娠期・分娩期・産褥期を一貫してその担当助産師が妊婦を支えていく。妊婦がどこで出産しても継続ケアができることは日本にはないとても大きな特徴であるし、院内助産やアドバンス助産師制度を進めている日本でも妊婦に対しての継続ケアを進めていくためには、ニュージーランドのような周産期医療体制の進んだ諸外国での情報を取り入れるために現地へ出向き、そこで働く助産師やその他スタッフの生の声を聴くことが刺激になり、これからのわが国の周産期医療制度について考えるために必要なことであると感じた。また、ダニーデンにある Otago Polytechnic 大学ではわが国の助産の歴史や現状、鹿児島県や鹿児島大学大学院での助産教育についてプレゼンテーションを行わせていただいた。研修前から学生全員で準備を進めることで、日本の助産、周産期医療制度の変遷について改めて学ぶきっかけとなり、鹿児島県の助産師の偏在化という課題についても改めて見直し、これから鹿児島県で働いていく人間として考えていかなければならないと思った。Otago Polytechnic 大学では一年生と二年生の講義の見学をさせていただいた。ニュージーランドでは助産師のダイレクトエントリーを行っているため、看護の勉強と助産の勉強を同時に行っている。そのため、なぜその検査を行わなければならないのか、本当に必要なことなのか、聴診器をあてる行為や検査内容の項目ひとつにしても先生に次から次に質問が出ており、日本とは違う助産学生の積極性を感じた。また助産学生の約半分はお産を経験したお母さんであるため、自分の生活リズムに合わせて勉強を進めることができるオンライン授業を行っている。このことは、自分の学習を自己管理として進めていかなければならず、また何回でも復習ができ自分の知識といて確実に蓄積されていく。ニュージーランドでは助産師が自律しているだけではなく、学生の時点で既に自律しているということを、今回の研修では一番に感じた。

研修後はまた学生で研修の内容を振り返ることで、それぞれの研修での学びを共有し、自分では気づけなかったことをまた新たな学びとすることはができるのではないかと思う。

〔研修後の抱負〕

研修後の課題としては、助産師の偏在化について真剣に取り組んでいかなければならないこと、またニュージーランドのように、わが国の助産師が自律、助産学生が自律するためにはどのような姿勢や取り組み、教育が必要であるかを、将来地域で働く助産師として働く、また指導的立場になる人間として、学生全員で考えていかなければならないと感じた。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者
所属：保健学研究科1年
氏　　名：萬歳　優美

授業科目名	周産期医療論
研修先（国・地域） 滞在地	ニュージーランド（ダニーデン、オークランド）
研修期間	平成 29 年 2 月 18 日（土）　～平成 29 年 2 月 24 日（金）

〔研修を通じて得た成果〕

ニュージーランドでエコーを行うのは超音波技師ということを知り、職種がそれぞれの専門に特化した知識技術を取得し提供することができるのではないかと思った。よって、ニュージーランドでは看護師と助産師は別物であるという認識だが、日本では助産師は看護師という大きな括りに入っているという印象を受ける。日本の助産師の専門性として、看護を学んだうえに助産を学ぶことができることは、日本で働くうえでは利点となると考える。なぜなら、昔から存在していた産婆は近隣住人にとってはかけがえのない存在で、取り上げてもらった産婆を家族のお祝い事などに招待していたという風習があった。このように、産婆が家族ぐるみで付き合うことによってその女性の社会背景を理解したうえで個別性のある医療を提供することができていたと考えられる。今後、産後ケアを強化していく必要がある日本では、対象である母子と切り離せないのが家族の存在であるため、産後ケアについて家族という視点を踏まえて考えていく中で、家族看護を看護学校の過程で勉強できていたことは今後助産師として働くなかで重要な意味をもつと考える機会となった。

助産学生の自律を助長しているのが、受け持つ女性を学生自らが様々なネットワークを利用して探してくる仕組みだと感じた。女性を探す方法として【チラシを作って貼る・新聞に載せてもらう・知人を介して紹介してもらう】などの説明を聞いたときに、それらの方法は自ら考えて行動しなければならないため、そういった状況を学生のうちから体験することで、誰かがやってくれるだろうという他動的な考えよりも能動的に動く力が身についていくのではないかと考える機会となった。

また、助産師会の学生代表枠があるという説明を受けて、とてもうらやましい制度だと感じた。なぜなら、日本では学生が助産師会の助産師と情報交換を正式に行う場がなく、助産師と学生に隔たりを感じているからである。学生のうちに助産師と交流を持つことは、将来同じ助産師として働く仲間として認められているかのように感じ、学生の自信や責任感につながると考える。また、助産師に学生のうちから意見することができる環境だと、自分の発言に責任がうまれるため自己学習に励み、一層自律が促されるのではないかと考える機会となった。

〔研修後の抱負〕

最も私がニュージーランドと日本の助産師に違いを感じたのが、会陰切開と縫合は助産師がするという話をきいたときである。私は、会陰切開と縫合は助産の一部だと思っているため、これらの医療行為を今後日本の助産師ができるように、私でもできることを探して行動していきたい。鹿児島県に産婦人科専門の超音波技師はおらず、産婦人科での超音波技師の必要性はまだ問われていないと考えられた。しかし、専門職が診ることで検査の精度があがると思うので、将来的には私も超音波技師の資格をとっていきたいと考えている。